

平成18年度病害虫発生予報第4号

平成18年 6月 8日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(葉いもち)	平年並	平年並
		縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	平年並	少ない
		ニカメイガ(第1世代)	平年並	少ない
		イネミズゾウムシ	-	少ない
果樹	ナシ	黒斑病	平年並	平年並
		黒星病	平年並	やや多い
		輪紋病	平年並	平年並
		アブラムシ類	やや遅い	やや少ない
		ニセナシサビダニ	平年並	平年並
	カキ	落葉病	平年並	平年並
		カキノヘタムシガ	平年並	平年並
	ブドウ	べと病	平年並	やや多い
		チャノキイロアザミウマ	平年並	平年並
	リンゴ	ハマキムシ類	平年並	平年並
ハダニ類		平年並	平年並	
野菜	スイカ、メロン	つる枯病、炭疽病	平年並	平年並
		うどんこ病	やや遅い	やや少ない
		アブラムシ類	やや遅い	やや少ない
		ハダニ類	やや遅い	やや少ない
	イチゴ	うどんこ病	平年並	やや少ない
		炭疽病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	やや少ない
		ハダニ類	平年並	やや少ない
	ネギ	さび病	平年並	平年並
		黒斑病	平年並	やや多い
		ネギハモグリバエ	平年並	平年並
		ネギアザミウマ	平年並	平年並
ブロッコリー	コナガ	平年並	平年並	
シバ	葉腐病(ラージパッチ)	平年並	平年並	

[参考]

気象予報(抜粋)

1か月予報(予報期間:6月3日~6月30日、6月2日 広島地方気象台発表)

向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並が多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

<可能性の大きな気温経過>

期	間	平均気温
6月	3日 ~ 6月 9日	平年並
6月	10日 ~ 6月16日	平年並
6月	17日 ~ 6月30日	平年並

普通作物

【イネ】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

（2）予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は少なかったことから、種子の保菌率も低いと予想される。また、現地においても苗いもちの発生は確認されていない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並が多いと予想されている。

（3）防除上注意すべき事項

ア 移植後は、ほ場をよく観察して早期発見に努め、急性病斑がみられたときは、防除指針等を参考に直ちに防除を行う。

イ コシヒカリ、ひとめぼれ等の本病に弱い品種、多肥、遅植え等の条件では特に発生しやすいので注意する。

ウ 補植用苗が本病の発生源となることが多いので、補植が終わったら放置せず、早めの処分を徹底する。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

（2）予報の根拠

ア 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されており、第2世代幼虫のふ化最盛期は平年並の6月下旬～7月上旬頃になると予想される。

イ 昨年の本病の発生量は少なかった。

（3）防除上注意すべき事項

ア 縞葉枯病の常発地で、育苗箱施用剤を行っていない場合には、第2世代幼虫のふ化最盛期（6月下旬～7月上旬頃）に防除指針等を参考にして、粉剤、粒剤などを散布する。

イ 本虫はイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないようにする。

3 ニカメイガ（第1世代）

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

（2）予報の根拠

ア 予察灯における初飛来日は平年並であり、向こう1か月の気温は平年並と予想されており、発蛾最盛期は平年並の6月上旬～中旬頃になると予想される。

イ 5月第5半旬現在、予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

ニカメイガに登録のある育苗箱施用剤を使用していないほ場では、葉鞘変色茎率が5%以上になった場合に、防除指針等を参考にして防除を行う。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月第5半旬現在、予察灯における誘殺数は平年と比較して少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 移植期の防除を行っていないほ場および移植期の防除を行っても成虫の発生及び食害が多いほ場では、防除指針等を参考にして防除を行う。

イ 成虫の発生密度が0.5頭/株以上になった場合には防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における5月下旬の孢子飛散数は、平年を下回った。

イ 5月下旬現在、幼葉や幼果などで本病の発生が一部で認められる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されており、今後、降雨が多くなると新梢葉の発病が増加することが予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月になると新梢葉が多くなり、薬液の付着むらが出やすいので、新梢の先端まで薬液が十分かかるよう注意する。

イ 薬剤はジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトまたはパルノックス)500倍とポリオキシソール水和剤1,500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における5月下旬の孢子飛散数は、平年をやや上回った。

イ 5月下旬現在、幼葉や幼果などで本病の発生が一部で認められる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されており、今後、降雨が多くなると新梢葉の発病が増加することが予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や幼果は取り除き、園外に持ち出すか土中に埋める。

イ 赤ナシの有袋栽培を行っているところでは、袋掛け直前に必ず薬剤散布を行って袋掛けを行う。

ウ 薬剤はアントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 伝染源となるいぼ病斑の発生の多い園が一部で認められる。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されており、病原菌の胞子の飛散数は平年並～やや多くなるものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は袋掛けで防げるが、袋掛けが遅れると発生が増加するので、摘果が終わり次第、早めに袋掛けを行う。

イ 果実および枝の発病を抑えるため、梅雨期の薬剤散布を徹底する。

ウ 薬剤はベルコートフロアブル1,500倍液、オキシラン水和剤600倍液などを使用する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月第1半旬現在、県予察ほ場におけるワタアブラムシの平均寄生新梢率は、2.5%(平年:12.9%)であり、平年に比べてやや少ない発生となっている。

イ 5月23日の巡回調査の結果、アブラムシ類の発生量はやや少ない状況であった。

ウ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多いほ場では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーは、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため年1回限りの使用とする。

5 ニセナシサビダニ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月上旬現在、県予察ほ場におけるニセナシサビダニの徒長枝先端葉1枚当たりの寄生虫数は、397.2頭(平年:748.4頭)であり、平年よりやや少ない発生となっている。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並と予想されており、発生最盛期は、平年並の6月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除時期は、発生最盛期と見込まれる6月中旬頃を目安とする。

イ 薬剤は、ハチハチフロアブル2,000倍液などを使用し、徒長枝先端葉に薬液が十分付着するように散布する。

[カキ]

1 落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 近年、本病の発生は少なく、越冬菌密度は低いものと見込まれる。

イ 本病は連続降雨により発病が助長される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、落花始め～生理落果期に、有機銅フロアブル1,000倍液、マンゼブ水和剤(ジマンダイセンまたはペンコゼブ)600倍液を10日間隔でそれぞれ1回ずつ散布する。

2 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 越冬量は平年並と見込まれる。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並と予想されており、成虫の発生最盛期はほぼ平年並の6月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 落葉病の防除時期に合わせてパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。

イ なお、パダンSG水溶剤は、開花後に発生するチャノキイロアザミウマにも効果がある。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所での発生が多い。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果粒が大豆大以上になると薬剤散布によって果粉が溶脱するので、果粒が小豆大までにアミスター10フロアブル1,000倍液またはストロビードライフフロアブル2,000倍液を新梢先端や副梢に十分量散布する。

イ 本病の発生が多い園では、薬剤が果房に直接掛からないように注意して、ホライズンドライフフロアブル2,500倍液を散布する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場の黄色粘着トラップにおけるチャノキイロアザミウマの誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並と予想されており、発生が増加する時期は、平年並の6月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

例年発生の多い園では、モスピラン水溶剤4,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍液などを6月上旬から中旬に必ず散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるので、果房にかからないようにする。

3 ハマキムシ類(チャノコカクモンハマキ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場の性フェロモントラップにおけるチャノコカクモンハマキの誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並と予想されており、ふ化幼虫の発生時期は平年並の6月中旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノコカクモンハマキの多発園では、ディプテレックス水溶剤80の1,000倍液などを散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるので、果房にかからないようにする。

イ 防風樹のサンゴジュは発生源になるので、防風樹での発生に注意する。

[リンゴ]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における5月下旬のハダニ類の寄生葉率は0%(平年:0%)である。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニの発生が認められた場合は、ニッソラン水和剤2,000倍液などを散布する。

野 菜

[スイカ、メロン]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、本病の発生はやや少ない。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されており、発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないように換気を行う。

イ 雨滴のあたる箇所または株元から発病するので、トンネル栽培のスイカの茎葉には雨がなるべくあたらないようにトンネル開閉を行う。また、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨のやみ間に防除する。

エ 薬剤は、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを散布する。スイカではアントラコール顆粒水和剤400～600倍、ダコニ-ル1000の700倍液などを散布してもよい。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ 本病は、25 前後の気温と乾燥条件で発病が助長される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、やや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア すでに発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤3,000～5,000倍液などを散布する。

イ つる枯病も発生している場合には、スイカではポリベリン水和剤1,000倍液、メロンではポリベリン水和剤1,500液などを散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町）に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は、平年に比べて少ない。

イ 現地のスイカほ場における発生量もやや少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、引き続きやや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 薬剤は、DDVP乳剤の1,000～2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。スイカのハウス栽培で収穫間近な場合は、ハチハチ乳剤の1,000～2,000倍液、マラバッサ乳剤1,500～2,000倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場におけるハダニ類の発生は見られていない。

イ 現地スイカほ場における発生量は、平年に比べてやや少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、引き続きやや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にはニッソランV乳剤の1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液などを散布する。発生がやや多い場合は、カネマイトフロアブル1,000～1,500倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。なお、コロマイト乳剤は薬害が生じやすいので、他の薬剤との混用散布は避ける。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、育苗床での本病の発生は少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、今後、やや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、特に6～7月の育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては、葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行い、発病初期までは、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ すでに発病している場合には、カリグリーン800～1,000倍液とパイコラール水和剤またはトリフミン水和剤5,000倍液を混用散布する。なお、炭疽病も発生している場合にはアミスター20フロアブル2,000倍液などを散布し

てもよい。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在の育苗床での発生はやや少ない。

イ 本病は高温多湿条件で発病が助長される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並が多いと予想されており、発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、罹病性品種については、薬剤を定期的に散布する。発病した株の薬剤防除は困難であるため、予防防除を徹底する。薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにも薬液が付着するように丁寧に散布する。

イ なお、下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。

ウ 育苗初期の薬剤は、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液またはバイコラール水和剤2,500倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルには展着剤を加用しない。

エ 育苗中後期の薬剤は、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液、ベルコート水和剤1,000倍液などを用いて、7~10日間隔で予防散布する。

オ 仮植床は排水良好な無病地を選ぶ。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(北栄町)に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は、平年に比べて少ない。

イ 現地のイチゴ育苗床における発生量は平年並~やや少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並が多いと予想されており、やや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はスミチオン乳剤2,000倍液、ベストガード水溶剤2,000倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、イチゴ育苗床におけるハダニ類の発生量はやや少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並が多いと予想されており、やや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハダニ類の発生源となる畦畔雑草に対し、ハービー液剤200倍液を散布するなど除草に努める。
- イ 発生初期にニッソラン水和剤2,000~3,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生量がやや多い場合は、コテツフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,000~1,500倍液などを散布する。

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、本ほの夏ネギ、秋冬ネギにおける発生は、平年に比べてやや少ない。
- イ 本病は比較的低温で降雨が多い場合、発病が助長される。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 6月に収穫する作型で、すでに発病の多いほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。
- イ 7月以降に収穫する作型では、6月上旬から、オンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。発病が増加する場合は、これらの薬剤にカリグリーンの800倍液を混用して散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、本病の発生量は平年並である。
- イ 黒斑病は気温が25前後で、降雨が多い場合、発病が助長される。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。
- イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

3 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における発生時期及び発生量は平年並である。
- イ 現地ほ場での発生量はやや少ないが、一部で発生量のやや多いほ場が散見される。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

定植時には、ベストガード粒剤の6 kg/10a 植溝処理土壌混和や、アクタラ粒剤5の6～9 kg/10a 作条混和、アドバンテ - ジ粒剤の3～6 kg/10a 作条処理土壌混和などを行う。粒剤の効果が切れた後は、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、現地ほ場での発生量は、平年に比べてやや少ないが、一部で発生量のやや多いほ場が散見される。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

定植時の粒剤処理は、ネギハモグリバエの項参照。粒剤の効果が切れた後は、マラバッサ乳剤800～1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍などを7～10日おきに散布する。なお、同一薬剤の連用は効果が低下するおそれがあるので避ける。

[ブロッコリー]

1 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（北栄町）におけるコナガの発生時期および発生量は平年並である。
- イ 6月上旬現在、現地ほ場における幼虫の発生数は平年並である。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

6月中旬以降収穫のブロッコリーで幼虫の発生がみられる場合、ノーモルト乳剤2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液などを7～10日おきに散布する。なお、防除にあたっては、薬液が葉裏にも十分かかるようにいねいに散布する。

[シバ]

1 葉腐病(ラージパッチ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、生産芝のほ場において本病の発生はほとんどみられない。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多く、発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生前にセレンターフ顆粒水和剤0.5gを0.5L/m²散布する。

イ すでにパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液0.5L/m²、バリダシン液剤5の500倍液0.5~1L/m²などをスポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.acis.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果やフェロモントラップ調査結果(ネキリムシ類、果樹カメムシ類)などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回の予報発表は、7月6日(木)の予定です。